

# 小田原史談

第126号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町 2-3-21

上京途中作

今茲丁卯十一月三日春同永原伯

民随幡山加藤大夫祇役京師命其

十五日旦到江戸拜謁 公口授

其意間一日歸小田原又間一日發

輒西上費本月廿日也

東都了事上西都正是霜飛永結途六十

三三々欲盡賢勞恍我忘良圖

四海東流三百年何圖一轉欲西遷化翁

不出挽回手忽見狂濤蹴碧天

何必齊微攘遠夷鴻臚古自有成規由未

闡外委元帥掣肘誤機知不知

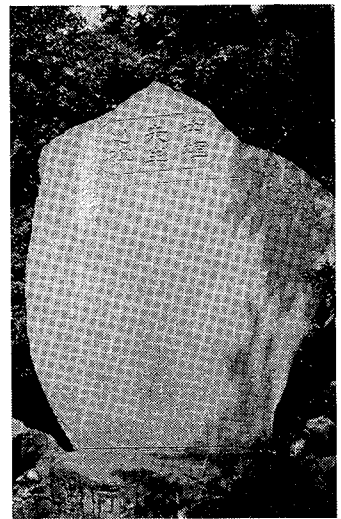
鎖國尊王自有詳何知巨猾竊營私月卿

雲客無明眼誰叩天閣說撫夷

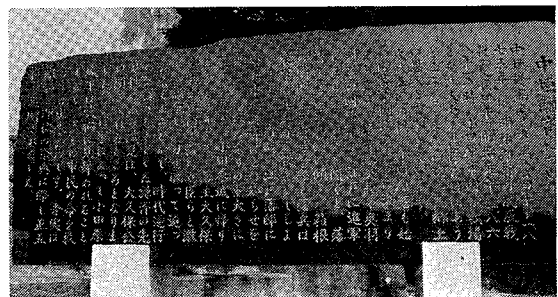
## 中垣謙齋真筆

中垣謙齋は幕末維新の際の小田原の鴻儒で、小田原が生んだ維新の勤王家として知られている。謙齋の書は勤敏達筆で頗る名文であった。この書は藩公に従って上洛して宮中を守衛した時の道中往復の文書で、謙齋が勤王の志を堅くした情状が脈々としてあらわれている。丁卯十一月三日とあるのは慶応三年（一八六七）のことである。

（原本所有者 中野敬次郎）



小田原市城山大久保神社入口の  
中垣謙齋顕彰碑



| 目次                  |      |
|---------------------|------|
| 中垣謙齋真筆              | (1)  |
| 小田原埋れ木発掘帖(一)        |      |
| 小田原の辞世文学            | (2)  |
| 江尻追分宿の巻             | (3)  |
| 東海道五十三次宿場史跡めぐり(第一回) |      |
| 日本橋ノ藤沢              | (4)  |
| 隅田河畔に小田原の史跡を見る      |      |
| 風外作の爺婆の石像           | (6)  |
| 相模国分寺(海老名) 鬼瓦は      |      |
| 千代庵寺鬼瓦の模作品          | (7)  |
| 鶴?の答 鶴は誤り正しくは鶴      | (9)  |
| こぼれ話                | (9)  |
| 預金封鎖と新田切替に          |      |
| まつわる話               | (10) |
| 嘉永大地震の新資料について       | (12) |
| 川柳 高井 喜雄            | (9)  |
| 短歌 鈴木 貫介            | (13) |
| 会員消息                | (16) |
| わが家の古き写真            | (16) |
| 岡野 忠夫               | (10) |
| 中野敬次郎               | (12) |
| 雑詠 佐倉 東郊            | (10) |

# 小田原埋れ木発掘帖(一)

## 小田原の辞世文学

中野敬次郎

平井権太夫妻墓石



は古い方である。同寺の墓地に小田原の蘭医として知られた市川家の墓があつて、代々の墓石がつまりしく並んでいる。その中の市川志弦の墓に  
○妙法はひと筋道の落葉かな

五湖亭 志弦

由阿弥

小田原の旧町名で筋違橋、今の本町四丁目の海岸通りに日蓮宗の古寺で蓮昌寺というのがあるが、この寺の墓地や境内には辞世の和歌や俳句を刻した墓碑が多数あるのは珍らしいことであるが、それはこの寺に小田原の旧家の墓が多い故であるかもしれない。その中の辞世俳句も二、三拾ってみると、平岡権太夫妻の一墓の墓石があつて、権太夫の辞世俳句と妻の辞世和歌とが並んで刻されてある。

権太夫の院号は「園心院」妻の院号は「縁心院」と言つて院号からして夫婦のゆかしい縁(えにし)のしほばれる墓である。

○泥の園染まぬも縁ぞ白蓮花

臘月亭 桃園述

とある。桃園は彼の生前の俳号である。この句は墓石に「辞世俳句」と前書き、更に句の頭書に「不染世間法、如蓮華在水心」と記してあつて、一般の辞世俳句と趣を異にしている。

平岡家は小田原藩の御抱え葺師の総棟梁として知られた家柄で、彼もその役にあつたが、延享二年三月十三日に彼の妻が  
○妙なれや法の蓮(はちす)の花の名に  
いざ後の世をかけて契らむ

という辞世歌を遺して夫に先立って世を去つたのを追慕して、亡妻の供養のために詠んだ句を辞世としたもので、白蓮花とは妻を指していて、その清純の性格であつたのを誉めている追悼句であるが、これをもって自己の辞世としているあたり、誠に夫婦相恋の詩(うた)として面白いものであるが、権太夫は宝暦三年(一七五三)八月二日に歿しているから、この種のものとしては、小田原で

と刻されているが、五湖亭は志弦の俳号であつて、俳諧については相当の力量のあつた人であるらしい。

市川家は元来眼科医であつたが、小田原に蘭学を導入し蘭方を伝えた家柄として特筆すべき家であるが、五湖亭志弦は当時小田原の西海子(さいかい)に住んで眼科医として名声があつたが、彼はまだ西洋医学は学んでいなかった。文化四年十二月八日に歿した。

さて、その子市川方(かた)と号蘭好が、江戸に出て、杉田玄白に学んで帰り、初めて小田原に西洋医学をもたらしした人物である。子方(蘭好)の子が有名な市川隆甫で、父と同様に杉田玄白に門人として学んだが、オランダ直輸入の医学の珍本ブレンダング眼科書を邦訳した人物として有名で、志弦、蘭好、隆甫三代の墓が並んでいる。

蓮昌寺にはまた前小田原市長であつた故鈴木十郎氏の鈴木一家の墓もある。

この鈴木家はもと大阪から小田原にきた商家で、家号も大阪屋と称したが、その小田原で家を興した祖先の大坂屋兵衛の墓がある。

○枕して寝たまの夢に散るもみじ  
これが、その与兵衛の墓に刻まれてある辞世の句である。

そしてその句の側に「嘉運居士」と刻まれてあるのが彼の俳号である。

天保二年二月三十日に歿しているが、素人らしからぬ辞世を詠んでいることよりすれば、風流の道にも精しく、嘉運居士の俳号文字よりすると、同家の家運はこの頃より大いに興つたものと思われ。

蓮昌寺に近く、同じ筋違橋町で今は南町二丁目にあつたが、浄土宗の大蓮寺という寺があつて、ここに小田原宿時代の本陣の一家である片岡本陣の代々の墓があつて、

その中に万延元年九月二十八日に歿した十二代片岡久左門常春の墓があるが、彼の俳号は永翁と言つて  
○罪とがのくもりも晴れて西の月  
という辞世が記されている。

俳人本職の辞世句碑としては、小田原谷津の曹洞宗高長寺に遠藤故厓の碑があつて、  
○都々かなく乗つたり蓮の台(うてな)かな

という辞世句が刻してある。

故厓は明治初期のすぐれた俳人であつたが、今は知る人も少なくなつたので、簡単な彼の経歴を紹介しておこう。

この碑は墓石ではなく、明治八年に歿した師故厓のために、門人で俳道後嗣の茂翠などの尽力によつて、明治十七年に建てられた顕彰記念碑であるが、長文の碑文によると、故厓は相州足柄上郡の産で、通称は市太郎といつて東都に出て、俳諧は児玉逸淵に学んで俳号を故厓と称し、後に剃髪して青霞庵と号して諸国を遍歴して技を磨いた。

後に師逸淵の嗣号可布庵を譲られて二世可布庵を称したが、老いて号を門人茂翠に譲つて小田原に帰り住んだとある。

辞世俳句の下に由阿弥とあるのは最後の号であろうと思ふ。

高長寺は北村透谷夫妻、父母、祖父母の墓もあるので知られているが、いま一つ「文政管我物語」として有名な浅田兄弟仇討の兄「鉄蔵光勝」の墓もある寺であるが、この寺の近くの同じ谷津の地に曹洞宗新光明寺があつて、この寺に浅田兄弟の弟万二郎の墓石がある。

この新光明寺に維新当時の小田原藩士だった二人の辞世を刻した墓石がある。一人は渡辺義寿のもので明治十三年四月三日歿の墓石に、  
○一人行く旅路はさびし枯野哉

○おちつけば光る浄土の十夜かな  
という二句があり、他は伴寿義の墓で、彼の歿した明治二十八年十月二十八日と刻した墓石に、  
○南無阿弥陀仏浄土の蓮に乗せ給へ

とある。照水は俳号であろう。

照水

さて、前記したものは、すべて墓石に彫された小田原

人の辞世句を採ったものであるが、一先づこれを置いて記録、文書の中から面白い辞世句を探して紹介しよう。

天明から享和(一七七一—一八〇三)にかけての二十年間は、小田原俳壇の最盛期であったが、この時代に大久保有隣、神田繁兄と並び称せられた小田原俳壇の二巨匠がいた。

大久保有隣(又左門)が千石取りの家老であるに對し素兄(尙助)は藩の輕輩中の輕輩で現米五石扶持二人分での下級武士であったが俳諧は大島蓼太の愛弟子で西湘雪門派の旗頭であつて、根っからの風流人であつた。

この人も文政元年春四月七十八歳のときふと病の床につき、寿命を知つてか門人を枕元に呼び集めて、

○これまでの心なりけり下し雨

この頃は俳諧の趣味は各階層に流行して、武道家の中にもこれに優れた人物が出たが、大島蓼太の門人で有名な流浪の俳人東海吞吐の小田原留滞中に教を受けた夢想流捕手の達人川添団助と鏡信一刀流の達人本山新作の二人はその主なる人物であつた。

川添団助は享和三年五月十六日に歿したが、病床に就いた門人達に、

○足腰の立つちがよしかへる道

と書して与えて、眠るが如く死についた。

本山新作は武道家であるが武士でなく、小田原藩の御抱左官棟梁であつた。

或る時、天守閣の大棟にのぼつて左官の仕事をしているとき、どうしたことか足をふみはずして四十メートル下の地上に落下して傷一つ負わないで助かつたという不思議な人物であつた。

これはさすがに武道の達人にて身が軽く、落ちる途中で何回か身を回軽させて落ちたがためと言われて、当時の人々を驚歎せしめた男である。しかし、この不死身の男も寄る年波には勝てず、文政九年の夏に七十歳で世を去つた。死に臨んで、

○涼しいぞ今日かたびらの死出の旅

という辞世を残して世を去つていった。

辞世の俳句も一つの文学で、辞世文学と申すべきであらうか。

### 東海道五十三次

#### 探訪のうち

#### 江尻追分宿の巻

高田喜久三

去る六月二十九日に訪れた江尻追分宿(今の静岡清水市)の一角に「追分羊かん」と大きな看板を掲げた老舗があつた。低い瓦の庇が傾いた文字通りの老舗である。

この暗くて狭い店先の上り框を上つて奥の座敷に入る。同勢四十五名では二間つづきの座敷は満員である。この店の主人府川松太郎氏はやおら立ち上つて名物追分羊かんの説明をはじめた。

「手前どもの追分羊かんの由来と申しますは、今は昔、江戸は三代將軍家光公の頃、私の御先祖のある病いに苦しむ明の僧と出逢いました。この坊さんを懇ろに介抱いたしましたところ、この坊様が快癒ののちありながら幽境静寂の気がつき、この坊様の小豆(あづき)の羹(あづき)の製法を伝授して下さいました。そこで私共では以来三百年の間の風味を代々伝えて今日に至つた訳でございます。羊

かんを作りますには先づ砂糖が欠かせません。当時としては貴重品であつた砂糖を一手に取扱うことを將軍様からお有し頂き、ありがたうことにこの地方の砂糖商売の元締として榮えて参つた訳でございます。されば私共は徳川様とはゆかりも深く、殊に十五代將軍慶喜様が駿府(今の静岡)にお引き籠りの頃は、手前のお引き籠りの頃は、手前の祖父と大へん昵懇となり慶喜様が伊豆あたりへ御狩獵の折りは手前どもへお成りになり祖父をお供にお連れなさいました。それ、今皆様がお座りの縁側がお好きで、よく庭を眺めておいでとのことでした。」

美しさとは裏腹に複雑な彼の心境をせんさくして見ずにはいられなかつた。

十五代將軍慶喜は大政奉還のち、公武合体政策の構想を打ち立てるいとまもなく、慶応三年十二月のいわゆる小御所會議のクーデターに遭つてもろくも領地返還を余儀なくされ、つづいて出された王政復古の大号令の前には一切の抵抗を不可能にした。鳥羽伏見の敗戦から一転江戸城無血開城と目まぐるしい変転の末、今は逆賊として駿府に隠遁した彼の心境をおもえば、ことに哀れを禁じ得ない。

「菊は榮える葵は枯れる」のざれ唄の通り、今は逆賊の汚名を被て空しく駿府に蟄居した慶喜は、まだ三十歳の若さであつた。権現さま以来の英まいな將軍と期待されながら志空しく今は隠忍と無聊の日々であつたのだらう。明治新政府が出発したとはいへ、反政府の分子は全国致る処にうごめいていた。慶喜一とたび起つては、新生児明治政府の倒壊はおよそ想像出来ることである。しかし、慶喜は起

たなかつた。日本国の將來を思えば一個の私心は塵埃の如きである。慶喜は隠忍すること、動かない事で時代転換の大きな原動力となつたともある。

明治三十一年三月二日、六十二歳になつた慶喜は初めて参内を許され、明治天皇に親しく謁見することが出来た。謁見のあと皇后は手ずから酢をされたという。朝敵徳川慶喜の汚名はこの時より晴れ晴れと拭い去られた。明治三十五年には最高の爵位公爵を頂き、徳川家の榮譽は今に至つて

いる。

追分羊かん主人の座敷には慶喜揮毫の次の軸が掲げられて色褪せていた。

香来華硯辺

香来って硯辺華やぐと詠むのであろうか。すべて私の心を胸におさめ、花の薫りと墨の匂いに僅かに慰みを得ている慶喜の心境がしみじみと伝つてくる詩句である。



山並み彩る晩秋の六十一  
年十月七日、晴天に恵まれ、  
午前七時小田原駅を出発。  
東海道藤栗毛道中の旅は、  
草鞋ならぬ大型バスで、総  
勢四十余名、大井松田イン  
ターより東名高速道を「お  
江戸日本橋七ツ立ち行列そ  
ろえてあれわいさのさ……」  
と歌われた、旅の出発点日  
本橋に向う。  
八時二十分日本橋に到着。  
旅の第一歩が始まる。

一 日本橋

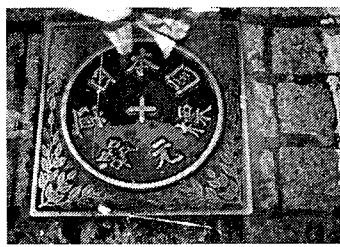
この日本橋は慶長八年  
(一六〇三)架けられ、翌九年、  
日本橋を基点とする五街道  
が整備された。

江戸時代ここよりの眺め  
は「旅鏡」に「この橋より  
西にお城、東に海あり、北  
に浅草・東叡山、南に富士  
山、かのこまだ  
らの雪まで見ゆ、  
左は魚河岸、賑  
ひ繁昌の地也」  
と記されている。

現在の橋は、明  
治四十四年(一九一  
一)に完成した長さ  
四十八・六メート  
ル幅二十七メート  
ルのアーチ型の石  
橋。青銅製の橋上装飾は東  
洋的な麒麟と唐獅子を配し  
た堂々たる偉容を誇る造り。  
日露戦争に勝利して国運隆  
昌のムードのうちに、日本  
を代表する橋として、限り

ない威厳を持たせたもので  
あろう。  
しかし、昭和三十九年建  
設の高速道路に空を遮られ  
て「これがほんとのほん  
橋」と誰かが言うように影  
がうすらざわびしい感じが  
する。

橋の中央部の、里程標の  
出発点を示す旧装飾電柱の  
あった場所には、五十セン  
チ四方の「日本道路元標」  
の青銅板がはめこまれてい  
る。その鑄標を踏んだとき



反対側は、関東大地震ま  
で魚河岸として繁栄してい  
た所で、その後、築地に移  
転した跡地として、その由  
緒を刻んだ立派な記念碑が  
建ち並んでいる。

二 日本橋を後にして  
「擬宝珠かける左繩、結  
んでとける咳のまじない」  
の京橋、幕府の銀・銭貨の  
鑄造所に由来する銀座を眺

小田原史談会創立  
三十周年記念事業

東海道五十三次  
宿場史跡めぐり

(第一回)



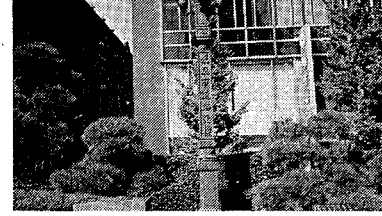
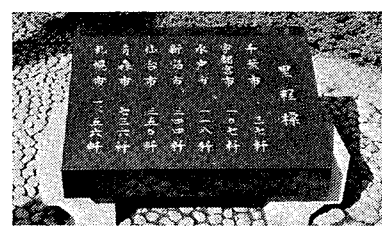
め、「汽笛一声新橋を」と  
鉄道唱歌の新橋・汐留を過  
ぎ、武蔵野の末之芝生の地  
が由来といわれるをを通り、  
文化二年(一八〇〇)伊能忠敬  
が全国測量の基点とした高  
輪大木戸跡を経て、次の見  
学場所泉岳寺に到着。

三 高輪泉岳寺  
天保年間に再建され十六  
羅漢を安置する江戸三大名  
門一つの山門  
をくぐり、中  
国禅僧の孟冬  
書「萬松山」  
の額を掲げる  
の梅木と石・  
竹囲いの血染  
の吉良上野介の  
首洗井戸・浅  
野公上屋敷裏門を移築した  
義士墓入口門を経て、播州  
赤穂城主浅野家の菩提所・  
長矩・大石内蔵助以下四十  
七義士の墓前に、義士討入  
前後を偲びながら各々線香  
を手向ける。

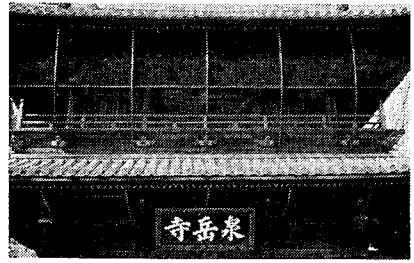
二階建八十坪の義士館内  
に陳列の貴重な義士の遺品  
数十点と伝える大石父子と  
四十七士全員の討入姿の木  
像を巡覧して、浪曲宗家桃  
中軒雲右衛門の発願により  
鑄された、元禄羽織姿に連  
判状を手にして東の空をに  
らむ、大石内蔵助良雄の銅  
像を背に、門前の土産物屋  
の売声を後にして次へ。

四 品川(一宿)  
明治天皇ご宿泊の本陣跡  
の聖蹟公園・お祭佐七や切  
られ与三郎とお富の墓ある  
妙国寺・太田道灌の持仏水  
月観音と江戸六地藏の内一  
体を有する品川寺・岩倉具  
視の墓所海蔵寺・品川遊女  
投入寺の海蔵寺など、バス  
の駐車が出来ず車窓で、狹  
く居残る町並を眺めて。

五 沢庵禅師の墓  
臨済宗東海寺の飛墓域に  
あって寺より約二百米ほど  
西よりの、京浜東北線々々  
脇にある。  
沢庵和尚(一五七三―一六四  
五)は、京都大徳寺の僧で、  
寛永四年(一六二七)いわゆる  
紫衣事件で幕府の忌諱にふ  
れ、出羽上山に流配された  
が許されて、三代將軍家光  
に重用され、幕府が品川に  
東海寺を創建するに及んで  
請われて開山となった。今  
一般に好まれている沢庵漬  
は和尚の創案である。墓は  
和尚の遺  
言と伝え  
る。大き  
な石二つ  
重ね銘文  
もなく、  
石垣で囲  
んだ簡素  
なものだ  
であるが  
国の史跡  
指定を受け



六 鈴ヶ森刑場跡  
鈴ヶ森と言うと何か出て  
来そうだが、旧東海道と第  
一京浜国道と交る交通量の  
激しい道添いの、植込に囲  
まれた三角地帯にあり、お  
仕置場として慶安四年(一六  
五〇)に開設された。  
この刑場最初の処刑者は  
慶安の変の丸橋中弥である。  
明歴二年(一六五〇)九月に  
は由比、丸橋の残党や家族  
五十七名、その後「お若え  
のお待ちなせえ」の白井権  
八、恋に焦がれて放火した



丘隅は本陣三代目兵庫の養子で、宝永四年(一七〇七)跡を継ぎ民政に当るが、やがて家業を譲り、江戸に出て成島錦江や荻生狙徠に学んだ。のち、民政上の事実や意見を集めた『民間省要』を著し、將軍吉宗に献上し幕政に寄与し、成島錦江の推挙で幕府に召され、普請御用役を命じられ水利土木工事に敏腕をふるい、荒川や多摩川の治水、我が郷土酒匂川の築堤など見事に完

られている。大治年間(一一六三)源義家の家臣平間兼豊が、仲間の中傷により領地を奪われ流浪の末にこの河原に住い、息子兼乗が四十二才の時弘法大師の靈夢によって、河原海中より木像を得て日夜供養を続け、高野山の尊賢上人が訪れ共に一寺を建立したと伝える。江戸初期弘法大師の別当寺として幕府の朱印を受け、寛政八年(一七九〇)十一代将

二八六〇八月二十一日、島津久光の前を横切った英人を、薩摩藩士が殺傷した生表事件など会長の車内説明を受ける。九 神奈川(三宿)宿場は今の神奈川通りから台町まで船着場所として旅籠屋・商家など繁昌の地のねむりからさめて横浜開港に伴う遺跡も多くあるが交通事情から横浜市内は素通りする。

在であると、保土ヶ谷史跡保存会の説明板がある。十一 戸塚(五宿)江戸へ十里、小田原へ十里の一日コースの街道宿駅で、十返舎一九は、弥次さん喜多さんをこの宿に泊めている。家康愛妾のお万の方(市内開津町出身)創建の長林寺がある。裏山に「当山開基清源院殿尊骸火葬之靈地跡也」の碑などある。

然記念物の大イチョウの老樹を配した庭園や庫裏・書院など静かなたずまいをみせている。小栗判官・昭手姫の墓、流行歌「赤城の子守唄」で知られる俠客板割浅太郎の墓、応永二十三年(一四二六)の上杉氏憲(禰秀)と関東管領足利持氏が戦った「禰秀の乱」で戦死した両軍の将兵を弔った敵味方供養塔と言われる根府川石の高さ一・五米の「怨親平等碑」それに、小田原市秋窪の寿昌寺の釣鐘などがある境内を一巡する。源義経ゆかりの白旗神社は車窓で、予定外のコース大庭城跡に向う。十三 大庭城跡

八百屋お七、盗賊の親分日本左衛門、義賊の鼠小僧次郎吉らが処刑された。当時使用しな五十センチ位のはりつけ用角石や、火あぶり用鉄柱の丸い穴ある丸台石などがある。

「南無妙法蓮華經」の題目碑は元禄十一年本門寺の日頭上人の建立によるなどの旧跡を、大経寺の堂守僧の解説案内で見学。

品川宿と川崎宿を結ぶ六郷大橋は度々の洪水で流失、貞享五年(一六八八)七月の洪水で崩壊した機会に架橋せず渡舟となる。

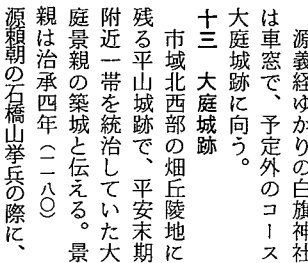
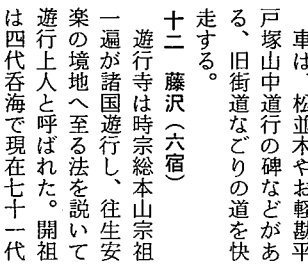
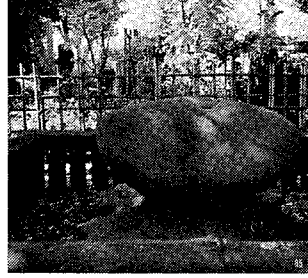
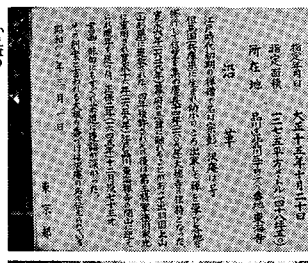
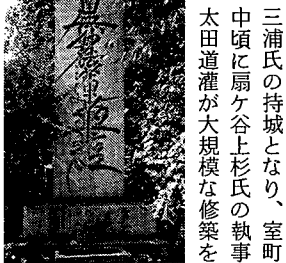
七 川崎(二宿)この渡舟は、川崎本陣主田中丘隅(二六六〇一七二九)が、宿場の窮乏を救うため、幕府に願ひ出て許を得、川崎宿が受け持つようになり、渡舟請負収入金や他の救済金が下付され、宿場の財政もようやく安定した。

成。のち江戸町奉行大岡忠相に仕え、多摩崎玉の代官に抜擢され良く民生を担当するが五ヶ月後に六十七才で没した。その墓が上平間妙光寺にあるので詣でる為に向うが、残念ながら駐車出来ず引返り、川崎大師駐車場に入り車内にて昼食をする。

八 平間寺(川崎大師)真言宗金剛山金乗院と号し厄除け大師として広く知られている。大治年間(一一六三)源義家の家臣平間兼豊が、仲間の中傷により領地を奪われ流浪の末にこの河原に住い、息子兼乗が四十二才の時弘法大師の靈夢によって、河原海中より木像を得て日夜供養を続け、高野山の尊賢上人が訪れ共に一寺を建立したと伝える。江戸初期弘法大師の別当寺として幕府の朱印を受け、寛政八年(一七九〇)十一代将

軍家齊や御三家、諸大名などの参詣もあり、開運厄除信仰の靈場として隆昌をきわめた。門外に土産物店軒をならべ、くず餅や大師だるま等の名物が売られ賑わいを見せている。八丁綴の「麦の穂をたよりにつかむ別れ哉」の芭蕉の借別の句碑・永平寺ともな曹洞宗の本山として有名な鶴見の総持寺・文久二年

この本陣は慶長六年(一六〇〇)伝馬制が設けられて以来、代々萩部家が勤め、紀ノ国屋文左衛門の次男新四郎が入贅しているが、十代悦甫は横濱開港時に、横濱町総年寄を命じられ、十一代悦選は、明治三年本陣廃止と共に姓を軽部に変えた。建物は明治五年の火災や関東大地震で滅失したが、古文書は多く残り貴重な存





して入部した。のち小田原北条氏の領有となった。今は土壘・空堀跡などを残し、丘の頂上近くは杉木立に囲まれ、入口には、往時を思わせる武家様式の、管理事務所とそれに説明案内板も備えられ、市民公園として良く整備されており、小田原北条氏に連なる城跡保存に深く感銘をいだいて、富りに見ながら、旅は道づれ

昔の旅人の歩いた街道の宿場名所旧蹟はわずかに残存している。高層ビルの谷間に旧街道の道中は狭く裏通りの役目を果して、車の運行も思うにまかせなかつたが、時代の交遷を目の当りに見ながら、旅は道づれ

## 隅田河畔に

### 小田原の史跡を見る

#### 風外作の爺婆の石像

#### 西山銚太郎

昭和六十一年一月十二日小田原史談会恒例の初詣バス旅行は、隅田川七福神巡りが実施された。会長以下四十五名を乗せたバスは、幸にして天候と順調なる交通状況とに恵まれ、かつ、会長の細心の計画により、

例の如く中野会長の詳細なる説明があったが、此の寺が小田原とは密接なる関係のあるものだと、大変興味深く思ったものである。

#### 一

ここに祀られてる布袋尊は笑みをたたえた風貌豊か太鼓腹の風格は定評がある。架空の神仏の多い中に布袋さんは中国唐代実在の禅僧で、本名「契比」、長汀子号し四明山に住み、容貌猫々しく太鼓腹を出し、布袋をかついで喜捨を求め歩いた。人々は弥勒菩薩の化身として尊んだ。

#### 参考文献

- 東海道五十三次 秋田書店
- 東海道腰栗毛 而立書房
- 今昔東海道の旅 日本交通公社
- ふる里の街道 長倉書店
- 郷土資料事典 人文社
- 中野会長配布資料 現地説明

徳川氏が関東を領して以来の小田原は、大体が大久保氏がここに封せられていたが、寛永九年(六三三)十一月二十三日、江戸城大奥最大の権力者春日の局の息子稲葉正勝が、下総の真岡から小田原へ転封となった。寛永十一年正勝死し、その子息正則が十二才で封を襲いだ。同十二年、正則は父母の慰霊の為、黄檗宗鉄牛和尚を開山として、小田原に長興山紹太寺を建立した。

正則は万治元年(二六五〇)閏十一月幕府の老中となり、以来二十余年延宝八年一月十二日迄幕閣にあつて国務に参画した。随つて小田原よりも江戸在住の期間の方が遙かに長かつたので、再び鉄牛和尚を聘して、隅田川のはたりの此の地に黄檗宗牛頭山弘福寺を建立した。本山宇治万福寺を模した堂々たる大明式建築であつた。

懐滅したので、昭和八年再建されたのが現在の建物である。これも寺院建築としては異色の、唐風建築である。

#### 三

弘福寺本堂右手前の小堂には、風外和尚の刻んだ爺婆の石の像が祀つてある。「風外」とは「風のそと」だから、風邪・咳に靈験あらたかだと云われて広く庶民の信仰を集めている。

風外和尚は、小田原の曾我山の洞窟に住み、一度は成田の成願寺に住したが、真鶴の洞窟に移つた。和尚は上州に生れ、捨子となつたのを寺に拾われ、大変に苦勞して育つた。父母に縁うすく顔も知らない和尚は見た事もない父母の姿を常に臉に描いて居たが、真鶴

在住中、己が脳裏にある慈愛に満ちた優しい父母の像を石に刻み、生けるが如くに孝養をつくして来た。小田原の城主稲葉正則は此の像を見て、その出来栄の立派さと、和尚の父母を思う至情に心をうたれ、像が山中に放置されるのを恐れて、己の屋敷に請いつけて供養した。

#### 爺婆の石像



稲葉氏は偶々貞享二年(一六八五)越後高田へ転封となつたので、此の像を前記牛頭山弘福寺に移してこれを祀り、供養せしめたのが今日に至つていのである。

#### 四

私は風外和尚の爺婆像を見て、和尚が或る日突然思い出して作つたものではないと思つた。或る年齢になつて、不意に思い出しているのなら、恐らく父母の若い



牛頭山弘福寺

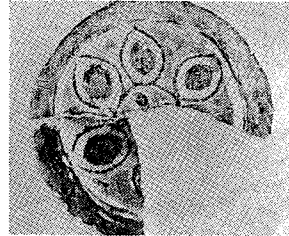


# 相模国分寺? (海老名) 鬼瓦は千代廃寺鬼瓦の 模作品

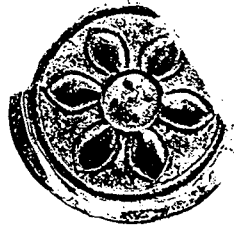
内田 盛雄

千代廃寺鬼瓦と武蔵国分寺鬼瓦の比較研究で千代、武蔵同範を筆者は以前提唱し、千代廃寺が国分寺と同一格式の瓦を用いた廃寺であることの認識を得たのである。

なお、石田茂作博士によればこの鬼面文瓦は新羅出土の鬼瓦に類することを指摘しておられる点、大陸から



六葉単弁鏡瓦 千代廃寺



六葉単弁鏡瓦 武蔵国分寺

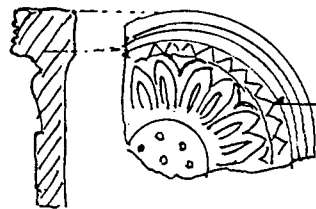
この調査のことを韓国系日刊紙「統一日報」で次の様に記している。武蔵の国分寺の基壇の構築法がこれまでのものと異っていること。この構築法は現在韓国の慶州で行なわれている皇竜寺跡の発掘調査で塔基壇全面に直径二〇厘米

の上に粘土を入れ突き固め更に石を敷いて粘土で突き固めながら、石の層を二十余層に積上げ基壇を構築していることである。これが日本に伝えられ簡略化されてはいるが、武蔵国分寺金堂基壇構築法に新羅の三大名刹の一つである皇竜寺の基壇構築法が用いられていることである。

さらに、今一つ千代廃寺から出土する瓦で六葉単弁鏡瓦も同じ様なことが云えるのである。この六葉単弁鏡瓦と同範のもが武蔵国分寺からも、出土しているものであり、両寺に共通したものがある。

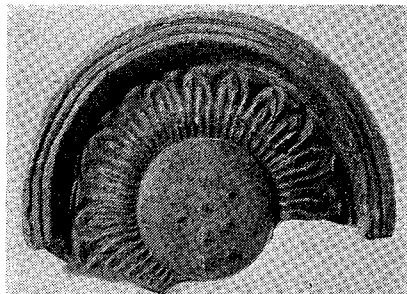
さらに、一九五七年東京国立博物館が主宰して武蔵国分寺の発掘調査が行なわれた。この時東大グループの調査員として、韓国文化財研究所長の金正基氏が参加している。

これ等のことから、新羅系の影響が色濃く出ていることを考慮すると、こうした工人の指導による寺院の建造があったことが充分に窺えるのである。

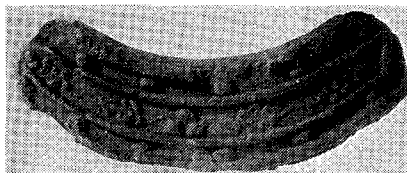


鋸齒文

前おきが長くなったが、ここで海老名国分寺瓦に比べると、単弁五葉蓮華文鏡瓦であるが、弁の表現は重弁風に二重の線で描かれ、間弁を持っていて、きわめて、平面的で、平面そのままであり、五個の蓮子を持つていて、外区は十個の珠文が弁と間弁に対応する様におかれている。周縁も立上らず弁の高さと同じで平面的である。



十葉蓮華文鏡瓦 千代廃寺



葡萄草文宇平瓦 千代廃寺

宇平瓦については、葡萄の計十七個を持つていて、宇平瓦については、葡萄

(I) 髪のはえぎわに、千

ぐらした内区は瓦の中心より左右に唐草文が広がり、均正唐草文である。しかし中心飾はなく小振りの対葉状の文様を置いている。唐草の図文に法隆寺等に見られる様な流れる優美さの線描はみられず、固さが目に付く、鏡瓦同様に極めて、平面的である。

この他蓮華文鏡瓦唐草文宇瓦に異ったデザインのものが見られるが、同じ様に平面的である。これに比べ、千代廃寺の千葉蓮華文鏡瓦は、周縁は三重爪文をめぐらし内区より立上りが大きく、外区内側、内区との間に鋸齒文を入れ込めると云う手のこんだ作りであり、蓮弁は返りぞりを付けた複弁であったり、又間弁も持っている。蓮子は一プラス六プラス十の計十七個を持つていて、

一、細部分析 (素人ばさが目立)

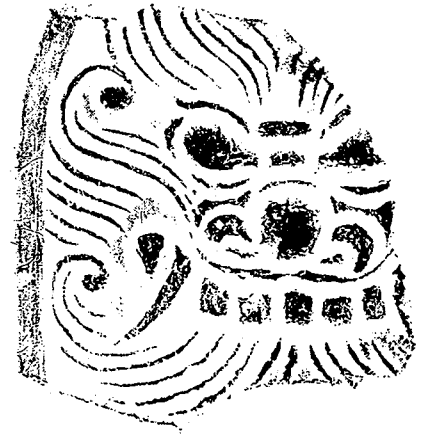


単弁五葉蓮華文鏡瓦 海老名



唐草文宇平瓦 海老名

千代廃寺の鬼瓦の図文と、海老名のものは、基本的な面で、類似しているが、かえってそのことが、気になるのである。



千代廃寺鬼瓦

(I) 代にみられる様に一列に整然と並んでいない。即ち、図文上のリズムがない。つまり不規則に生えているので美的感覚に欠けている。

(II) 美的感性に欠けている点では堅髪(A)の部分がある。平行して流れる髪毛がこの部分でセバメられ、すぐ上の部分で極端に広がってしまっている。同じように牙の上に生える毛の部分(B)も同様。

(III) 目の下から巻毛が太く生えて、それが枝別れして、一方が下目蓋に接触し、上方に伸て、巻毛のウズ

と接触している。今一方は、その巻毛になっっている。こうした枝別れや、接触させるなどの図形自体論理的美術構成法から、逸脱してしまっている(図、海老名鬼瓦、C、Dの部分写真の方を参照)。

(IV) 堅髪の1、2、3、4、の間隔の各差がバラバラである。

(V) 版の彫り起しが土手彫り(土手の様に上が丸味がある)であ

る為、全体に線が弱められて千代に比べて女性的になっっている。この為強く見せる様に目玉をわざわざ入れ込んでるところなど素人ばさ目立つ。

以上の様なことから解る様に、海老名国分寺の鬼瓦は、美的感性図法様式から逸脱しており、素人臭さが随所に見られる。これに比べ、千代廃寺の鬼瓦は美的感性は鋭く髪の流れは配列されている。より本流の新羅系の流れをしっかりと受け留めている。千代廃寺の鬼面は、石田茂作博士によれば、この種の鬼面は新羅出土の鬼瓦に類するものであると指摘している。

相模国分寺(海老名)

相模国分寺? (海老名) 鬼面は千代廃寺鬼瓦の模作品

一見して分る様に図文が似ている。さてそこで幾つかの問題点を列挙してみると、

(I) 先づ巻髪にみられるワラビ手様式の巻毛である。牙左横に巻毛一箇所と目の左上に一箇所及び額に一箇所である。この部分は千代のは欠損して、分らないが同范である武蔵にこの部分が見られること。

(II) 巻毛の間に配した毛並も模したスタイルを取り入れている。

(III) 牙及び門歯が形を模している。

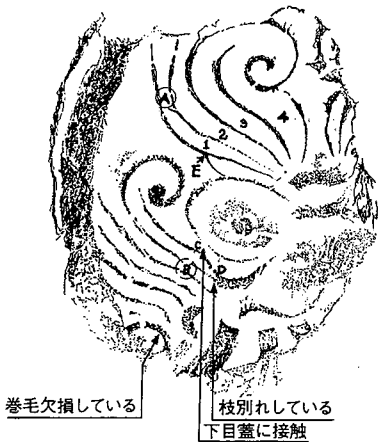
(IV) 鼻の横しわであるが同様の手法で取り入れている但し海老名二本である。

(V) 眼球の形態は目玉を除いて、同様なスタイルである。

(VI) 眼球の周囲目蓋の縁を同様につけている。

(VII) 鼻頭は団子鼻で若干アレンジをしている。

以上のことから海老名のものは、千代のものを明らかに模した模作品と思われるのである。これ等のことからして、海老名の鬼瓦は後作のものであることが分るし千代廃寺の鬼瓦は新羅の本流をなすものであり、美術的にも優れた風格をもっている。こうした形態からしても、奈良時代の瓦であ

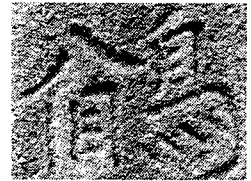


ることは明白であり、国分寺瓦の格式がある。海老名の瓦は平安の様相を呈しており、時代からしても下っていること。千代廃寺の瓦を焼いた窯跡は、松田瓦窯跡であり、この窯跡は、奈良時代特有の穴窯形式をとっており、海老名の瓦を焼いた瓦窯跡は町田市小山町でこの窯は平窯であり、この平窯窯法式は、平安期のものである。又千代廃寺出土の瓦は白鳳から奈良時代のものであり、これ等の瓦は海老名には見られない。むしろ、海老名の瓦は平安以降の瓦が主であり、しかも法隆寺式伽藍配置であり、国分寺伽藍配置からすると、詔に基づく国分寺は、やはり諸条件を備えた、千代廃寺以外にはないと云えるのである。



# 鳩？の答 鳩は誤り、正しくは鴿

松田文雄



小田原市早川海蔵寺の墓  
地には、戒名の上に「鳩」  
の字を書いた石碑があると  
いう。なんと読むのか、ど  
んな意味があるのか、西野  
明氏から質問をうけたので  
一言答へることにしよう。

「鳩」の字は、『諸橋大  
漢和』には、最も似かよっ  
た形の字として「鴿」(か  
ん)の字を載せているが、  
この字ではない。西野氏は、  
表記したように、石碑の通  
り「鳩」の字形で記録して  
いるが、正しくは「鴿」の  
字である。

現在、墓石や塔婆の戒名  
の上に「鳩」の字を書く例  
は殆んどない。数年前、青  
森県下の調査に出向いたと  
き、弘前市の郊外の墓地で

新しい塔婆に書いてあるの  
を見つけた。一部の地域を  
除いて消滅してしまったと  
言ってもよい。  
「鴿」の字は江戸中期頃  
まで全国的に用いられた。  
それは師資相承(師から弟子へ  
密に伝わる)の切紙・断紙で伝  
えられたもので、嗣法の弟  
子以外には知らされないも  
のであった。  
この字は『金剛頂瑜伽最  
勝秘密成仏随求即得神変加  
持成就陀羅尼儀規』にもと  
づくもので、「破地獄咒」  
の「唵佐羅耶努瑟鴿布羅耶  
娑婆訶」の「鴿」(たん)の  
字を取ったという。略して  
「鴿」と書く。勿論のこと  
諸橋「大漢和」には載って  
いない。

川柳

高井喜雄

近頃は子のかすがいももろくなり  
女房と歩調の合わぬ百貨店  
タレントの離婚は記者をかき集め  
親のすねかじれる距離で独り立ち  
行きづまるところで顔出す神仏

これを訓読みす  
る場合「鳥八白」  
に分解し「うはち  
きゅう」と読む。  
この意味は、秘  
伝として伝えられ  
た切紙によれば、  
「鳥是三界唯一  
心」とあり、鳥は三界(欲  
色・無界)のことで、全世界を表  
すは一心(絶対心)の表出であ  
ることを示し、また「台三  
世不可得也」とあるように、  
台は三世(過・現・未)に涉っ  
て不可得(存在するもの総て認識  
の対象にならぬ空)であることであ  
ることを示している。すな

わち、比の世は絶対心のあ  
らわれであり、全ての存在  
は空であることを「鴿」の  
一字で表明したことになる。  
それでは、何故に墓石や  
塔婆に書くのか。切紙によ  
れば、「偈日、偶落屍上、  
妙度陸沈、奇哉一字、何只  
千金」とあり、「鴿」の一  
字が、もし屍の上に落ちた  
とすれば、それは巧妙な力  
を発揮し、陸沈(地獄)から  
救ってくれる。なんとすば  
らしい一字であり、価千金  
のねうちがあると云うので  
ある。



正保二年(一六四五) 早川海蔵寺の墓石

要語として用いられてきた  
ものである。しかし、江戸  
中期、曹洞宗に面山瑞方  
(一六三一―一七六六)が出て『洞  
上室内断紙棟非私記』を著  
わし、これを妄説として斥  
る。  
(駒沢大学文学部教授・文学部長  
小田原市板橋香林寺住職)

## こぼれ話

松島俊治さん

(元小田原市文化財保護委員)

郷土文化館研究報  
告 No.22に「小田  
原の稀産樹につい  
て」と題して、小  
田原市内の特異で  
珍らしい樹木を十一種ほ  
ど紹介している。

植物の形態分類となる  
と素人には、ちょっと近  
づき難いが、この報告書  
は専門的ながら、気易く  
読めて楽しさがある。  
例えば、国府津・石田  
房之助さん(先代は有名な元  
国鉄総務石田礼助さん)宅の臥  
竜座論梅。根元から地を  
はい曲りくねった臥竜梅

と花に何個かの実をつける  
ザロンウメと、一株で二つ  
の性質を持つ珍らしい種類  
だという。好事家垂涎の存  
在であろう。

一般の梅が雌しべ一本で  
あるのに、座論梅は一つの  
花に雌しべが数本ある。と  
ころが、全部は熟さず、落ち  
こぼれが出て、残るのは三  
三個がせいぜい。禅僧の座  
論の問答で敗けた者が抜け  
てゆくのに結びつけて名付  
けられたとか、その名の由  
来も面白い。機会があれば  
一度見たいものである。

小田原市本町四丁目・正  
恩寺のザボンの木。「長崎  
のザボン売り」という歌が  
一時非常に流行したことが

あるが、調査したところ、  
長崎県産でなく、ほとんど  
が鹿児島県産だったとか。  
そのザボンの木が小田原に  
あるとは面白い。

高さは約六メートル、株  
元周囲一・四メートルとい  
うから、きわだって大きい  
ものだ。もともと、実は小  
タマノキ。幸田口門のイ  
けて落ちてしまいうらしい。

接木のあとが見られず、実  
生から育ったものではない  
かという。

あるいは、その昔、南国  
の珍果を手にした住職が、  
小田原の地にも、これを成  
らしてみたらと、功德のつ  
もりで蒔いたのではないか  
なといった、余計な想像を

扇町二丁目鈴木久子さん  
宅のキササゲ。松永記念  
館のテナダイウヤク。城  
山四丁目板橋見附・光円  
寺のノウゼンカヅラ

(西野 明)

個人金融通帳 近頃のことである。書類を整理していたら「個人金融通帳」の用紙が出てきた。

通帳といっても、ザラ紙の両面に印刷されたお粗末なもので、四十年経た今では、赤茶けてシミが出ていて、複写機でコピーすると全面的に黒ずんでしまう。

そこで、会報に載せるに当って、専門の写真屋さんの手を煩わし、生地が白く映る特別の印画紙で実物大に焼いてもらったが、それでも若干、黒さが残っている。会報に載せた写真は実物の1/2ほどの大きさである。

食糧難とインフレに喘ぐ中で

そんなチャチなシロモノだが、戦後の一時期、各家庭にとっては、「封鎖預金」からお金を引出す際の証明として大切な書類で、年配の人達なら記憶が残っている。

「預金封鎖」が行われたのは「個人金融通帳」の印刷の通り昭和二十一年であるが、どういふ訳か□月が入っていない。実施に当っては、GHQのお墨付が必要

要だが、いつO・Kが得られるか分らないので、内々仕事を進めてため、月を入れなかったのではないかなどと、当て推量するのだが、果してどうであろうか？

ところで、「預金封鎖」が行われた六ヶ月前の昭和二十年十月、幣原喜重郎が内閣を組織している。しかし「占領下の日本」である。

### 岡部 忠夫

## 預金封鎖と新円切替にまつわる話

なつて生き延びようとする、その日暮らしの生活だけが。今日の経済発展を予想し得た人は、何人いたであろうか……。

ちなみに、日銀券発行高を見ると、敗戦時の二十年八月十五日に三百二億円、同年十二月末五百五十四億円、二十一年二月末六百億円と、七ヶ月間に倍増している。

その原因は、占領軍のための施設や復員その他の巨額の国庫支出によるもので、それにこの通貨膨張と共に、食糧を始めとする消費物資の絶対量の不足による物価上昇、さらには、通貨への信用低落からする流通速度の加速が、さらにインフレを昂進させていった。

選挙法の改正、労働組合法の制定、財閥解体、農地改革など「民主化」の諸改革である。

しかし、国民の大部分は、敗戦の虚脱状態からまだ立ち直れず、食糧難とインフレの中で、先行きなんの展望がなかった。ただ必死に

千円の日銀券の通用を三月二日までと限定。新円と旧円の交換期間は二月二十五日から三月七日まで。交換限度は一人につき百円。ただし戦災者は一人千円、一世帯五千円を限度、それ以外の旧円は、全部、金融機関に預金として封鎖。

② 封鎖預金からの引出しは、一カ月につき世帯主三百円、家族一人につき百円。

医療支払資金は支払請求書の呈示が必要。冠婚葬祭は千円迄、媒酌人連署の証明、死亡診断書の呈示が必要。教育費は百五十円迄、在学証明書の呈示が必要。給料支払は月額五百円迄、それ以上は封鎖預金に預入れ。

③ 選挙費用は法定選挙費の二万五千円を限度。④ 引揚者・復員者の携帯を認められる限度は、一般人千円、将校五百円、下士官・兵二百円。

このようにして「新円生活」が始まり通貨の発行高を一時的に押えて、インフレの荒療治に入るのであるが、その実、効果は拳がら

### 雑 詠

佐 倉 東 郊

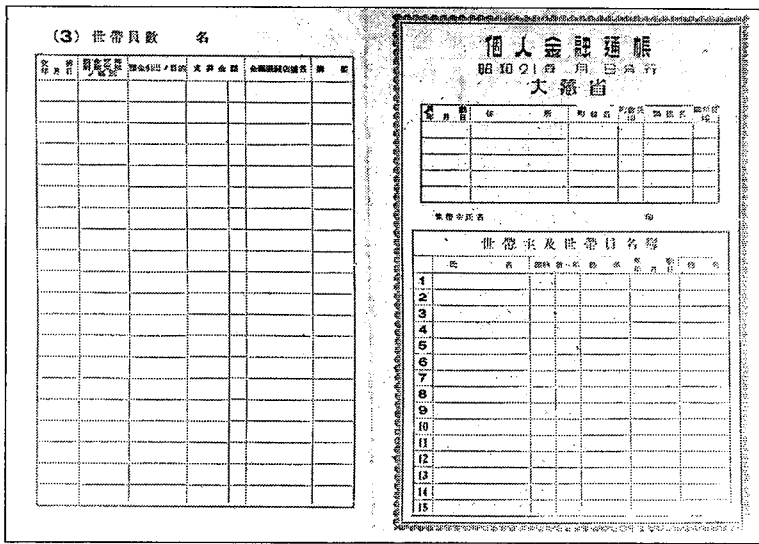
桐一葉直下の石を眠らする  
雲湧きて衆寡敵せず芋嵐  
赤とんぼ終生富士に登らざる  
土地つ子に夜目の山河や花芒

ず、再びインフレは進行することになる。それは、生産が伴わない日銀券の増発によるものだが、このことはさて置いて、再び「個人金融通帳」の話に戻そう。

「個人金融通帳」は、先に、小田原市ではその急場の対策として、町内会単位に駐在員を置いて、

「個人金融通帳」の最初のところに町会長印と隣組長欄印がある。ところが、その欄に町会長や隣組長が証明するの

の全体主義組織で、戦時翼の替体制がそのまま温存され



あったとき、持参の米穀通帳と照合確認といった簡易な事務で、一日の取扱件数もさほど多くなかった。駐在員事務所の看板は、町内の休業同様の店先に掲げられ、座売の置が敷かれたところが事務をとる場所、その店の座机が利用された。

駐在員制度は長くは続かなかった。半年ぐらいのものであったかどうか、それも記憶がはっきりしないが、

勿論「個人金融通帳」の廃止と共に。廃止に当って、その用紙を保存して置いたのだが、また廃止に際して、市では嘱託員を役所に集め、その折、助役であったか、それとも部長からであったか、嘱託員に対して、市の正規の職員になって欲しい、と言う要請があった。戦中から戦後、市吏員の欠員が続いたからであろう。だが、応募者は少なかったと思う。再びインフレ昂進する中で、安い給料で、魅力がなかったからに外ならないが、昨今の市職員の募集に何倍かの人が集まる状況と較べると、隔世の感がする。

生涯で最も思い出に残る出来事だと語る元行員

「預金封鎖」で、旧円が預け入れられるのは、小田原支店の分だけではなかった。日本銀行小田原代理店の業務を兼ねているため、小田原市・足柄下郡内の郵便局が受け入れた旧円で、小田原郵便局がとりまとめた分を、超過金として、預託を受けたのである。旧円の回収期間は二週間、その受入額は日頃の数十倍かの数となるので、札を数えるのに出納係だけでは間に合わず、他の係までが応援するという忙しさであった。

それに、回収の旧円は、日本銀行本店に直接現送するよう予め指示を受けていたが、その時期は、預金封鎖期限の三月七日以降のことで、回収期間中は、小田原支店に保管して置かなければならなかった。

ところが、支店の大型金庫に収納しきれず、一部屋を空けて格納する始末であった。

小田原から日本橋の日銀本店迄その現送には、車を仕立てる訳だが、車は木炭が燃料のトラックである。おまけに段ボールなどの梱包材料が入手できない時代だから百枚単位の旧円を十束ずつ封じたものを、幌付きの荷台に積み込み、シートを覆い、たいした荷物でないように装うった。荷台に乗った人には、さり気ない態度で見張るように指示をした。流通しなくなった旧円とはいえ、事故が起るとは、大事である。そんな訳で、日銀に無事納入し終わったときは、ほっと一息をついたという。

このような大仕事の他につまらないことに気がつかつたことがあった。進駐軍の兵士が度々銀行にやって来たことである。はじめのときは、何事かと思つたが、彼らは女子行員が目当てであるのが分つたが、言葉がよく通じないので帰つてもらうのもひと仕事であった。

第三国人のこわ談判

しかし、それ以上に煩わしく、うるさかったのは、預金封鎖を受けた第三国人が毎日のようにやって来ては談じ込むことであった。

その頃、もと日本の殖民地出身の人達を第三国人と呼んだ。

彼等は、一時期戦勝国民よろしく威勢よく振舞うことがあった。敗戦前途加えられた、社会的・経済的

| ページ | 段行   | 誤                         | 正                         |
|-----|------|---------------------------|---------------------------|
| 5   | 4 2  | 日本の名字み使用<br>(写真は移築完工の雨葉庵) | 日本の名字に使用<br>(写真は移築完工の葉雨庵) |
| 2   | 5 4  |                           |                           |
| 13  | 22 6 |                           |                           |

配島さんは、明治三十六年(一九〇三)五月の生れ。二十一歳の大正十二年、関東興信銀行(のち合併して横浜興信銀行となり、さらに横浜銀行と改称)の小田原支店に勤め、最後は昭和三十六年、同行の伊勢原支店長で停年退職しているが、若き日、横浜の野沢屋デパート社長宅に書生として住込み、夜間、横浜商業学校に通い、苦学力行した人である。

「預金封鎖・新円切替」の頃は、小田原支店長代理として活躍している。四十年代前半の男盛りのときだ。支店長代理という、今では支店次長の下で複数の支店長についているが、その頃は支店長につく役職であった。

「預金封鎖」で、旧円が預け入れられるのは、小田原支店の分だけではなかった。日本銀行小田原代理店の業務を兼ねているため、小田原市・足柄下郡内の郵便局が受け入れた旧円で、小田原郵便局がとりまとめた分を、超過金として、預託を受けたのである。旧円の回収期間は二週間、その受入額は日頃の数十倍かの数となるので、札を数えるのに出納係だけでは間に合わず、他の係までが応援するという忙しさであった。

それに、回収の旧円は、日本銀行本店に直接現送するよう予め指示を受けていたが、その時期は、預金封鎖期限の三月七日以降のことで、回収期間中は、小田原支店に保管して置かなければならなかった。

ところが、支店の大型金庫に収納しきれず、一部屋を空けて格納する始末であった。

小田原から日本橋の日銀本店迄その現送には、車を仕立てる訳だが、車は木炭が燃料のトラックである。おまけに段ボールなどの梱包材料が入手できない時代だから百枚単位の旧円を十束ずつ封じたものを、幌付きの荷台に積み込み、シートを覆い、たいした荷物でないように装うった。荷台

に乗った人には、さり気ない態度で見張るように指示をした。流通しなくなった旧円とはいえ、事故が起るとは、大事である。そんな訳で、日銀に無事納入し終わったときは、ほっと一息をついたという。

このような大仕事の他につまらないことに気がつかつたことがあった。進駐軍の兵士が度々銀行にやって来たことである。はじめのときは、何事かと思つたが、彼らは女子行員が目当てであるのが分つたが、言葉がよく通じないので帰つてもらうのもひと仕事であった。

第三国人のこわ談判

しかし、それ以上に煩わしく、うるさかったのは、預金封鎖を受けた第三国人が毎日のようにやって来ては談じ込むことであった。

その頃、もと日本の殖民地出身の人達を第三国人と呼んだ。

彼等は、一時期戦勝国民よろしく威勢よく振舞うことがあった。敗戦前途加えられた、社会的・経済的

を当てはめて見たのであろう。

ところが配島さんには、永年の銀行マンの生活の中で培われた、銀行は何より信用が大事である、といった倫理感がある。これは、当時、銀行マンの共通した感覚であつたらう。一部には生活難のために『浮貸し』をして、職を棒にふつた人がいるが、それは例外の話だ。

配島さんの篤実、意志的な資質は、その倫理感に結びついて、第三人の筋の通らぬ、再三にわたる強談判にも、腹を立てず穏やかに接した、と思われる。最後には黙して話らず応じていたかもしれない。第三人人が何回も銀行にやって来たという、配島さんの話からすると、どうしても、そのような話の組立てになるのである。

ところで、業を煮やした第三人人は、ついに、配島さん宅に押しかけてきた。配島さんは、そのとき塩作りをしていて。月給だけでは一家を養えないので、塩を作って収入を補っていた。

配島さんは、現在、横須賀市役所保険年金課長をしている長男眞太郎さんの許に身を寄せ、横須賀に住んでいるが、その頃は、山王原の海岸側の通りに住んでいた(現在は次男夫婦が居住)。裏庭を出ると、そのまま海岸に出られるようになっていた。

塩作りは、原始的な方法で行われた。海水を水桶に汲み、天びん棒でかついで来て、大釜で煮つめる。配島さんは、休日それに銀行に出かける前と、ひけてから、その仕事にとっかかることになる。大釜は自家用の醤油を作るのに作られたものだが、食糧が統制になってから、そんなことも出来ずに、納屋にしまい込まれていたものである。

調味料を手に入れるなど思いもよらず、多くの家庭では、一升びんをぶら下げて海岸に来ては海水を汲んで持ち帰り、醤油代りにしていた頃だ。塩は、農家と食糧と交換する格好の物だった。当時、そのことを『物交』と物々交換を略して盛んに使われたが、塩を煮つめる新も物交で入手している。

その塩作りに黙々として働く配島さんの姿を見た第三人人は黙って帰って行った。そして、再び銀行に談じこむことはなかった。

以上は、配島さんが退職されてから聞いた話で、二十何年か前のことになる。月二十六日、生涯を閉じられないと、念のため、手紙で配島さんの確認をとった。ところが、その連絡が済む次第である。

嘉永大地震の資料として詳しいのは「小田原藩士星見某書翰」(震災予備調査報告書第四十号所載)と「小田原藩士高沢六左エ門報告書」(高麗雑誌記事)などが知られておるので、これらは昭和五十一年に私の著した『近世小田原ものがたり』の小田原大地震の歴史編に記載して説明しておいたが、この『相州小田原大地震之記』はその後発見されたもので、いまだどこにも発表されていない新資料で、原本は横浜の県立文化資料館の所蔵である。

この記録は、従来見つかっていない資料よりも内容が詳しく、小田原領(小田原城下町・足柄下郡・足柄上郡・御野)の被害を刻明に記したもので、これ以上の詳しい資料はない。記末を見ると、「丑二月十四日出。地方御役所」とあって、地震から十二日目の二月十四日に、地方役所が詳細に被害状況を調査したものを領主の小田原藩の役所に呈出した記録であることがわかるが、呈出した原本も記事も今は失われて伝わらないが、恐らく地方役所が藩役所に呈出する原本を誰かが(地方役所の役人か)大急ぎで書き写して残したものがこの『相州小田原大地震之記』であろう。しかし余程急いで写したもので、所々に脱字と思われるところ、誤字と思われるものがあるので読者はよほど注意してほしい。地震後十七日目の二月十九日

嘉永六十二年二月二日巳ノ刻相州小田原大地震ニテ城内ノ家中屋鋪長家所々大破ノ町郷共竟一天守同壁長押共大破但渡櫓大破一同所南ノ方瓦塀九十二間ノ所内八十七間櫓破一同所石垣十間程孕大破 一北多間櫓破一同所統北ノ方石垣三間余震込損シ一同所統木門渡櫓半潰ノ門台石垣共大破一同所矢来門ノ左右柵共損石垣損シ一常盤木橋損シ 一南多間櫓二棟半潰一同所東ノ方石垣二間程孕大破一同所統南ノ方瓦塀打廻廿五間内十間半余倒一鉄門半潰 一同所門台左右石垣孕出シ大破西ノ方打廻り七間程孕内同所ヨリ打廻り外側石垣九間程孕ミ東ノ方内外打廻り十一間程孕ミ大破一同所統瓦塀北多間櫓際迄長延四十五間余倒一同所門統北多間櫓際迄ノ内石垣十三間全孕ミ大破一同所西ノ方瓦塀長延四十二間程倒 但門上共一同所石垣三間程孕 一同所打廻りヨリ天守取付迄瓦塀四十一間大破 一鉄門内高石垣打廻り長延廿一間程崩 一同所瓦塀八間全倒一同所裏石垣六間程崩 一裏門半潰一同所左右瓦塀不残庭二階櫓取付迄八十一間程倒 但門上共一同所南ノ方石垣廿三間程内十三間櫓大破 但門台共一同所番所半潰 一同所北ノ方棧瓦塀十一間程大破一同所番所統棧瓦塀六間程倒一用米四棟大破 一同所二棟半潰一屋形不残半潰 但櫓ノ間鎗術場劍術道場共一棟潰料理所食所一棟潰 一屋形玄関前通ヨリ列座座鋪中庭瓦棧瓦塀四十六間程内廿三間半大破一食所入口棧瓦塀八間程倒掛り

### 嘉永大地震の新資料について

中野敬次郎

次に掲載する「相州小田原大地震之記」は嘉永六年(一八五三)の二月二日(新暦に改算すると三月十一日)の午前二時に起きたいわゆる嘉永の小田原大地震の新発見資料である。

小田原藩主大久保加賀守家来高沢六左エ門の名で幕府の老中阿部伊勢守へ報告した「小田原藩士高沢六左エ門報告」という有名な記録は、恐らくこの二月十四日の地方役所呈出記録を簡単に整理して幕府へ呈出したものだろうと思われる。脱字、誤字はあっても極めて貴重な小田原地震新資料である。

#### 相州小田原大地震之記

- 嘉永六十二年二月二日巳ノ刻相州小田原大地震ニテ
- 城内ノ家中屋鋪長家所々大破ノ町郷共竟
- 一天守同壁長押共大破但渡櫓大破
- 一同所南ノ方瓦塀九十二間ノ所内八十七間櫓破
- 一同所石垣十間程孕大破 一北多間櫓破
- 一同所統北ノ方石垣三間余震込損シ
- 一同所統木門渡櫓半潰ノ門台石垣共大破
- 一同所矢来門ノ左右柵共損石垣損シ
- 一常盤木橋損シ 一南多間櫓二棟半潰
- 一同所東ノ方石垣二間程孕大破
- 一同所統南ノ方瓦塀打廻廿五間内十間半余倒
- 一鉄門半潰 一同所門台左右石垣孕出シ大破西ノ方
- 打廻り七間程孕内同所ヨリ打廻り外側石垣九間程孕
- ミ東ノ方内外打廻り十一間程孕ミ大破
- 一同所統瓦塀北多間櫓際迄長延四十五間余倒
- 一同所門統北多間櫓際迄ノ内石垣十三間全孕ミ大破
- 一同所西ノ方瓦塀長延四十二間程倒 但門上共
- 一同所石垣三間程孕 一同所打廻りヨリ天守取付迄
- 瓦塀四十一間大破 一鉄門内高石垣打廻り長延廿
- 一間程崩 一同所瓦塀八間全倒
- 一同所裏石垣六間程崩 一裏門半潰
- 一同所左右瓦塀不残庭二階櫓取付迄八十一間程倒 但門上共
- 一同所南ノ方石垣廿三間程内十三間櫓大破 但門台共
- 一同所番所半潰 一同所北ノ方棧瓦塀十一間程大破
- 一同所番所統棧瓦塀六間程倒
- 一用米四棟大破 一同所二棟半潰
- 一屋形不残半潰 但櫓ノ間鎗術場劍術道場共一棟
- 潰料理所食所一棟潰 一屋形玄関前通ヨリ列座
- 座鋪中庭瓦棧瓦塀四十六間程内廿三間半大破
- 一食所入口棧瓦塀八間程倒掛り

- 一 風呂屋脇板塀七間余倒掛り 一 既大破
- 一 飯焚部屋半潰 一 駕籠部屋大破
- 一 庭二階櫓曲ノ家根壁大破 一 同所南側石垣窪ミ
- 一 同所南ノ方瓦塀五十一間程倒
- 一 同所櫓際ヨリ南ノ方石垣十五間程崩 一 同所矢場損シ
- 一 同所平櫓大破 一 同所統西ノ方瓦塀廿一間半余倒
- 一 銅門渡櫓半潰 一 同所門台左右石垣震出し
- 一 同所統東ノ方瓦塀打廻り廿二間程倒
- 一 同所西ノ方瓦塀六間程倒
- 一 住吉門半潰 一 同所左右門台石垣震出し大破
- 一 但西ノ方打廻り三間半余東ノ方石垣断
- 一 同所瓦塀左右打廻り三十六間余内廿八間余倒掛り門台共
- 一 同所升形東ノ方石垣十間程内六間程崩
- 一 同所外通石垣内ノ方へ倒ル 一 馬出し門曲
- 一 同所北ノ方瓦塀九間程倒
- 一 同所打廻西ノ方瓦塀十三間程掛り
- 一 馬出し門南ノ方瓦塀七間程損シ
- 一 同所中仕切門曲 一 同所左右瓦塀十二間程大破
- 一 同所西ノ方石垣二間半程窪ミ 一 同所番所損シ
- 一 既曲輪瓦塀九十三間程不残大破
- 一 同所二階櫓同壁家根共大破 一 茶室屋中切門曲損シ
- 一 同所左右瓦塀廿八間程倒掛 一 茶室屋損シ
- 一 同所番所損シ 一 南門曲 一 同所番所損シ
- 一 同所左右瓦塀折廻り六十間程倒
- 一 南曲輪東ノ方二階櫓曲ノ家根壁大破裏手石垣窪ミ
- 一 同所西ノ方二階櫓家根壁損シ
- 一 南曲輪西ノ方櫓統瓦塀四十七間程内土前程大破
- 一 山岸橋向橋台石垣震出し大破
- 一 幸田門大破 # 東ノ方石垣大破
- 一 同所統左右石垣瓦塀十五間余内四間程倒十一間程倒掛り
- 一 幸田口番所損シ 一 三ノ九二階櫓大破
- 一 同所南ノ方瓦塀打廻り七間程倒 一 大手渡櫓大破
- 一 同所番所潰 一 同所外門大破
- 一 同所北ノ方瓦塀四十六間全大破
- 一 同所升形東ノ方瓦塀十三間余内九間程倒
- 一 箱根口御番所大破 一 同所裏棧瓦塀四間半程倒
- 一 同所渡櫓大破 一 同所升形南ノ方瓦塀打廻廿九間

- 余倒 一 同所 # 御門家根損シ 一 同所左右瓦塀
- 九間余損シ同所櫓統西ノ方瓦塀四十三間程内七間倒
- 使者屋脇大木戸左右石垣瓦塀三十四間程内廿六間程大破
- 浜手外門大破 一 同所棧瓦塀四十八間程大破
- 同所番所損シ 一 諸櫓古所集成館一棟潰
- 同所習書長屋一棟潰 一 同所鎗術場潰
- 同所長屋半潰但一棟ノ内 一 諸櫓古所土蔵潰
- 同所武笠蔵一棟半潰 一 同処溜り一棟潰
- 同所所役所一棟半潰 一 大金方雑用所役所一棟潰
- 用所土蔵二棟大破 一 列座勘定所共一棟半潰
- 同所土蔵一棟大破 一 寺社町方役所一棟半潰
- 同所門潰 一 同所土蔵一棟大破 一 同所諸色小屋五棟潰
- 木挽小屋一棟半潰 一 同所細工所一棟損シ
- 普請方道具預長屋一棟半潰 一 船小屋潰
- 上方口番所潰 一 江戸口番所潰
- 同所西ノ方棧瓦塀十三間大破
- 御進献御殿惣体壁損シ 一 同所□□橋損シ
- 時の鐘搗堂家根□外共損 □新蔵八棟内七棟
- 蔵 # 上家間坐共大破一棟壁其□損シ
- 同所大金米見役出役場内大金ノ方ノ分半潰米見役ノ方潰
- 一 燔蔵壁惣体大破
- 同所番所損シ 一 浜蔵一棟半潰
- 同所諸色小屋七棟損シ 一 西海子蔵一棟大破
- 同所釜屋銅焚部屋本馬部屋共一棟大破
- 同所蔵一棟壁大破 一 御府内口ノ木戸三十九ヶ所大破
- 使者屋一棟大破 一 自是箱根ノ方
- 箱根御関所江戸口海手ノ方角櫓損シ
- 同所石垣表通長サ五間余孕表通長三間程崩
- 同所山手ノ方裏通石垣長三間四尺余崩
- 同所制札場表角櫓損シ 一 同所休足所ヨリ勝手通石垣長サ十一間余崩 一 概裏通石垣長サ一間余孕ミ
- 西御番所棟側不残大破 一 同其外共根大惣振損シ
- 箱根府鐘搗堂 # 鐘撞ノ石ニ統所共曲損シ
- 根府川御関所小田原口御門統東ノ方丸太柵一間半程倒 # 石垣崩 一 西御番所向通丸太柵二間程倒其
- 所惣体倒掛り # 石垣二間程損シ

一 矢倉次御関所上下門大破

一 同所而御番所大破廻り石垣崩

一 同所定番人居宅三住居内二住居大破一住居損シ

一 川村御関所上下御門損シ 一 同所御番所惣体曲損シ

一 廻り石垣所々損シ 一 同所定番人居宅二住居損シ

一 畑宿掛り鳥橋左右高欄袖四ヶ所損シ

一 須雲川橋南橋台ノ内石垣崩 一 湯本三枚橋向橋台ノ内石垣崩

一 酒田村高札場廻り石垣損シ

一 國府津橋西ノ方橋台損シ川上ノ方石垣長七十二間崩

一 山西村押切土橋ノ杭惣体震込 一 西小磯村切通土橋

一 両橋台損シ 一 大磯宿三沢土橋向橋台損シ

一 今井村御神牌御牌石倒掛り

一 松原大明神拜殿幣殿潰本社廻瑞垣損シ

一 山王権現東ノ方石垣長サ七間程崩其外損シ

一 慈眼寺鹿島大明神本社拜殿幣殿潰

一 安國寺愛宕本社幣殿曲 其外損シ鐘搗堂石垣損シ

一 同所摩利支天社損シ上家大破

一 用米稻荷社半潰 一 伊谷治郎右エ門屋鋪内諏訪明神ノ社損シ

一 峰屋茂八屋鋪内弁天社損シ

一 三乗寺御番屋損シ御供所大破本堂損シ休足所大破其外惣体損シ

一 一本源寺御番屋本堂其外惣体大破

一 永久寺仮本堂其外共惣体壁損シ

一 □源寺仮本堂其外共大破 一 慈眼寺御靈屋

一 大久寺御廟前御石牌六本倒損シ

一 石瑞垣後ノ方廿一本不残倒内八本折損シ

一 同左ノ方十一本損シ内八本折損シ右同断笠石共損シ前通り其外共損シ 一 石燈籠十本倒 # 損シ

一 蓮上院仮本堂庫裏共損シ

睡蓮の葉にいろ濃き藍の蛙みて  
この夜の夢や永久にさめずあれ

鈴木貫介

(感想) 心にあるイメージをさらっと歌った洗練された歌です。印象がくっきりしていて読者の心に訴える感覚がはつきりしています。本質のものがよく分る生れついでての歌人で、私などとても作れないものです。(渡辺その)

一愛宕安国寺本堂壁其外所々大破  
 一蓮船寺前升塀下右垣損シ 一天神下中間部屋大破  
 但十四間棟□□□□□ 一同所割跡跡長屋四間棟大破  
 右之通御城而所々大破之方荒増御普請方借写  
 一御家中屋鋪破損 二百廿七軒  
 内皆潰廿八軒 半潰廿五軒 大破七十六軒  
 中破三十一軒 小破六十五軒  
 一御番帳外屋鋪 廿五軒 内皆潰三軒  
 半潰三軒 大破六軒 中破二軒 小破十二軒  
 一門潰十二ヶ所 一塀十四ヶ所 一石垣百廿七ヶ所  
 一土蔵三十ヶ所 元勘定所山口庭助御貸長屋統  
 一十二棟潰 戴幸田坂口金兵之御貸長屋統  
 一八間棟潰 瓦長屋小林八十次郎統御貸長屋  
 一廿四間棟潰 元鷹部屋金成四郎同断  
 一十二間棟大破 元勘定所和歌宮源五兵之同断  
 一十九間棟大破 鷹部屋大西直太郎同断  
 一八間棟大破 戴幸田鈴木勝弥同断  
 一十二間棟大破 同所平田理三郎同断  
 一十二間棟大破 同所西本九十九同断  
 一廿間棟大破 湯川屋鋪山田島太郎同断  
 一十六間棟大破 同所島海万吉同断  
 一十六軒棟大破 元勘定所初番土屋同断  
 一十一間棟大破 大工町三軒屋松浦清馬同断  
 一八間棟大破 同所片岡作太郎同断  
 一十二間棟大破 瓦長屋青木権左之門同断  
 一廿間棟大破 山角町表青木権兵之門同断  
 一十二間棟大破 同所裏富田與次右之門同断  
 一十二間棟中破 同所瀬込喜三郎同断  
 一五間棟中破 諸稽古所小川信右之門同断  
 一十間棟大破 元藏下木曾統同断  
 一廿間棟小破 湯川屋鋪岩井勝太夫同断  
 一十二間棟小破 戴幸田片山莊太郎同断  
 一十二間棟小破 瓦長屋田中順平同断  
 一四間棟小破 水無屋鋪塚部ノ三十口同断  
 一十二間棟中破 元勘定所初番部屋同断  
 一四間棟大破 角田數馬統古川良之助同断  
 一三住居潰 道浦極人組屋橋大作統  
 一三住居潰 時柳助七郎組村田百右之門統

一三住居同 山本逸馬組山口栄三郎統  
 一三住居同 桑野新五郎組 一三住居同  
 一松山又之助組 一三住居同 角田數馬組  
 一十七住居同 道浦極人組 一十六住居同  
 一時柳助七郎組 一十四住居同 酒井伴方組  
 一八住居同 山本逸馬組 一十住居同  
 一須田太郎兵之組 一七住居同 黒柳孫右之門組  
 一三住居同 村越内蔵之亟組 一十四住居同  
 一関小左之門 一廿住居同 元勘定所陸尺手廻部屋  
 一廿住居同 水無屋鋪中間部屋 一住居内  
 一見尾作大夫組 一十六住居同 相馬清四郎組  
 一十住居同外二家中破損家名前不殘認皆潰  
 半潰大破中破小破口訳度別帳認置  
 公儀御□□左之通  
 一水道崩六百十五間半 一板橋村ヨリ畑宿迄道破損  
 一廿一ヶ所長二百一十一間内六十一間欠所百六十一間崩  
 一同並木敷地破損六十一ヶ所長サ百五十四間  
 一内二百八十九間崩百九十八間割廿六間石橋崩  
 一三子山辺ヨリ往還大石夥鋪落往來通路指止り  
 一水道堰路石垣崩 三百十五間  
 一林堤段長十六ヶ所 一根返り木百五十本  
 潰家之方  
 前島左門 近藤左金次 野村慎八  
 中島佐金次 浦井以春 松山又之助  
 杉山小源太 畑 親蔵 源水繁蔵  
 森晴兵之 手島文次郎 水岡四郎右之門  
 関名八右之門 尾崎完助 岩根文兵之  
 小竹作兵之 山口捨次郎 宮殿左寓  
 山下喜八郎 廣瀬卯二右之門 竹内十内  
 鷹見為助 牧野又兵之 峰屋重大夫  
 小高直右之門 早川破右之門 大久保清之助  
 岡崎三平 宮津嘉平次 津村租八  
 日向屋鋪面々九十九被下置屋鋪 三十一軒  
 半潰之方  
 孕石數馬 黒柳弥右之門 村山玄碩  
 松濃鎌之助 相馬清四郎 伊藤與十郎  
 石川安之助 石川鍵之助 近藤□次郎  
 岡崎友二 野村清二 岡田秀之亟  
 大須賀善右之門 村田吉之助 川島英香

木村林右之門 久保田六右之門 徳岡大郎  
 辻満寛二 岡四郎右之門 集山三保蔵  
 木村善八郎 別府信太郎 一柳喜兵之  
 平井藤蔵 増田八十八 杉崎清次郎  
 小川之助跡 御屋鋪 二十八軒  
 大破之方  
 辻甚四郎 磯田團八郎 武藤大膳  
 牧伊兵之 柴田波之助 島村又一郎  
 多賀數右之門 鈴木字平次 奥平三八郎  
 河野小八 飯田伴五右之門 小林作蔵  
 豊田又作 中村茂三郎 中村某  
 清水 素 邑井庫之亟 山本丈兵之  
 久下文 宮部弥一郎 岡本熊太郎  
 田中茂平 上野彦右之門 市橋  
 戸田勝太郎 伊田與五兵之 服部孝太郎  
 牧島惣兵之 岡崎常蔵 大原卯助  
 配島庄兵之 小森定太郎 吉岡金之助  
 木内猪之助 弁才天新屋鋪 百江藤蔵  
 笠原與助 辻小平太 坂部喜右之門  
 須藤好蔵 塚本左金太 金子銚右之門  
 植田字兵之 上村市十郎 小林友衛  
 栗田丈右之門 村山喜兵之 廣中伊右之門  
 山下春江 大津喜惣次 荒井治次郎  
 志摩宗之助 村岡欣五郎 木野村慎助  
 杉本清五郎 簗瀬弥惣之門 奥平甚八郎  
 横井伴次 岩瀬佐兵之 植田弥三郎  
 一丸左十郎 片野茂之助 野村左源太  
 山下銀三郎 西原鉄兵之 西岡玄庵  
 加藤市太夫 村越内蔵之亟 大久保英左之門  
 梅原靱負 柳沢新右之門 三幣又左之門 山本内蔵  
 本多直記 高根伊織 村田八蔵 近藤外記  
 木村林右之門 吉田寛次 堀 秀春  
 中破之方  
 杉山一馬 金井鉄太郎 美浦徳右之門  
 岩村鍵蔵 西田源七 三浦寛作  
 小川弥源太 松尾徳蔵 大橋儀兵之  
 萬室仲右之門 立石川之助 神原平作



- 成瀬彦兵 築窪蔵人 有安十学
- 金沢六郎 島田大助 松尾軍次郎
- 宮部藤蔵 飯野平左エ門 市川貫太
- 大久保邦之丞 永岡源之丞 木野村東兵エ
- 村山清助 伊藤安之丞 石井珊貫
- 小島丹造 源水禮右エ門 浅尾仁左エ門
- 村田伊助 川添留蔵 戸田儀三郎
- 三十三軒

町家之方

- 一本家潰廿軒内二軒御伝馬役家 十二軒人足役家
- 半潰百三軒内十二軒御伝馬役家 九十一軒人足役家
- 同破損家四百三十軒内百七十四軒御伝馬役家
- 二百五十六軒人足役家
- 土蔵潰二十八棟内三棟御伝馬役家 廿五棟人足役家
- 同半潰二百七十六棟内四十五棟御伝馬役家
- 二百三十一棟人足役家
- 破損八十四棟内十九棟御伝馬役家六十五棟人足役家
- 物置小屋潰一ヶ所人足役家怪我人三人男二人女一人
- 伝馬怪我無之候 外二町々寺社之分
- 本堂潰十軒 一同半潰四十一軒 一庫裏潰十軒
- 同半潰四十一軒 一堂潰十二軒 一同半潰三十三軒
- 宮潰十四軒 一同半潰十二軒 一鐘搦堂潰六ヶ所
- 同半潰一ヶ所 一表門潰廿ヶ所 一同半潰四ヶ所
- 土蔵潰三棟 一同半潰十三棟 一物置小屋潰十六ヶ所
- 同半潰十二ヶ所 一境内石垣崩落五十二ヶ所
- 同堀崩廿七ヶ所 一灰小屋潰七ヶ所 一同半潰三ヶ所
- 神主舞太夫殿潰三ヶ所 一同半潰三ヶ所
- 厩半潰一ヶ所 一門前地借家半潰十七ヶ所
- 幣殿拜殿潰三ヶ所 一人馬怪無之
- 右相州分計り

お知らせ

次回東海道五十三次史跡めぐり

第五回東海道五十三次史跡めぐりは、来る九月廿八日(日)バス二台で、廿三宿の島田から廿九宿の浜松入口あたりまでの行程を、日帰りで予定しております。どうかふるってご参加下さい。

地方宿郷中之分

- 一高千四百三十七石七斗二升此反別百四十三町七反七畝六歩内反別十九町四反六畝十九歩東 同十七町八畝二歩南 同百七町二反二畝十五歩中
- 一百姓衆二千二百廿九軒之内八百廿四軒皆潰千四百五半軒半潰 外二千二百六十軒程破損 此破損時ハ御届
- 々除内皆潰二百四十九軒 半潰四百七十四軒 破
- 損六百廿九軒東 半潰百六十四軒皆潰廿二軒破損七
- 十四軒南 皆潰五百六十三軒 半潰七百六十七軒
- 破損五百九十三軒中
- 一土蔵五百十九棟 皆潰八十八棟 半潰二百八十六棟
- 破損百四十五棟 又皆潰三十三棟 半潰三十棟
- 破損九十三棟此方東 又皆潰七棟 半潰廿六棟
- 破損二十棟此方西 又皆潰四十八棟 半潰百三十棟
- 破損三十二棟此方中
- 一厩灰小屋ニ早屋物置 内千二百八十六軒皆潰
- 八百三軒半潰 又内四百六十九軒皆潰 二百廿三軒
- 半潰 百五十二軒大破此方東 又皆潰六十軒 半潰
- 五十五軒 大破十八軒此方西 又皆潰七百五十七軒
- 半潰五百廿五軒 大破七百五軒此方中
- 一堤筋千五百三十六ヶ所 崩落破損内二百五十八ヶ所
- 東 五十八ヶ所西 千二百廿ヶ所中
- 一水門#埋樋掛樋七十七ヶ所 内三十九ヶ所崩落
- 三十八ヶ所破損 又内八ヶ所崩落 四ヶ所破損此方
- 東 四ヶ所崩落破損無シ此方西 廿七ヶ所崩落 三
- 十四ヶ所破損此方中
- 一堤崩三千二百八十ヶ所 内千四百四十三ヶ所東 六百
- 四十八ヶ所西 千四百九十三ヶ所中
- 一山崩三百四十一ヶ所 内百四十九ヶ所東 九十二ヶ
- 所西 百ヶ所中
- 一脇往還道五百五十ヶ所 内二百六十ヶ所崩落 二百
- 八十一ヶ所破損 又十一ヶ所崩落二十四ヶ所破損此
- 方東 百九十四ヶ所崩落 破損無シ此方西 六十四
- ヶ所崩落 破損無シ此方西 六十四ヶ所崩落二百五
- 十九ヶ所損此方中
- 一橋三百五十一ヶ所内百四十二ヶ所崩落二百九ヶ所破
- 損又内五十六ヶ所崩落三十二ヶ所破損此方東 七ヶ
- 所崩落十八ヶ所破損此方西 七十七ヶ所破損此方中
- 一川除石倉二千四百八十七間 内七間東 四百四十六

間西 二百三十四間中

- 一川除土手長一万二千四百八十一間半 内二千七百六
- 十三間崩九千七百十五間半破損 又内千四百七十間
- 崩四千四百八十五間此方東 二百間崩落破損無シ西
- 千八十九間崩落 五千二百廿三間半中
- 一石垣千六十ヶ所崩落破損 内七ヶ所東 八百六十五
- ヶ所西 百八十八ヶ所中
- 一怪我人拾人 内五人男五人女 又内男一人女三人東
- 男三人女一人西 女一人男一人中
- 一死馬四疋 東無シ 西無シ 中四疋
- 一死人廿三人 内十四人男九人女 又内男二人女二人
- 東 男五人女一人西 男七人女六人中
- 一作道千六百二十八ヶ所崩落破損 内四百三ヶ所東
- 百七ヶ所西 千百十九ヶ所中
- 一高札場三ヶ所 内一ヶ所東 一ヶ所西 一ヶ所中
- 一石〇四ヶ所破損 内東無シ 西一ヶ所 中三ヶ所
- 一湯二皆潰 一炭竈六十六ヶ所皆潰
- 右ハ相州駿州村ノ当二月二日地震ニテ田畑其外前書之
- 通崩落破損潰等取調如是也
- 丑二月十四日出

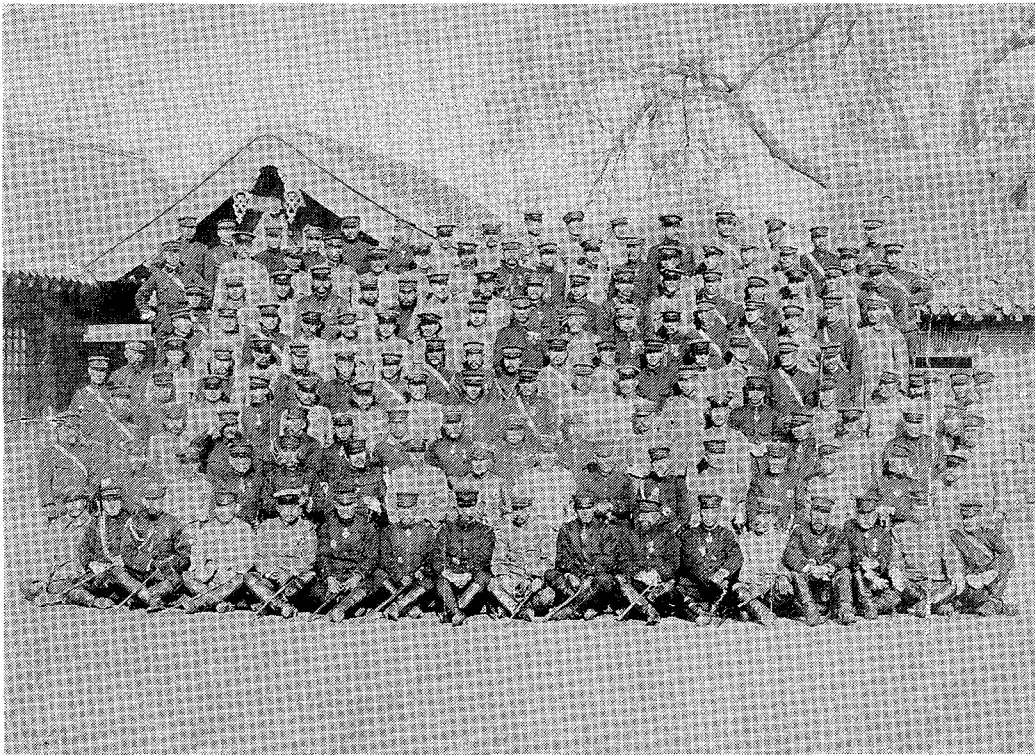
地方御役所

(註) ①元本の振仮名はカタ仮名の一箇所のみ。ひら仮名の分は、本文を載せるに当ってつけ加えた。  
②誤字の明瞭な箇所は訂正した。

会員消息

◎田島の杉崎正五さん  
軍隊に行った経験があるからと満洲事変以降の戦死者への鎮魂の気持から、田島出身者について記録を残すため調べたところ、四十三名のうち約三分の一に当る人は、詳しいことが分らなくなっていたという。

◎アメリカカの武田敏治さん 各地の同業者から子弟の店員教育を頼みこまれる。教師としての適性を持つからであろう。柔道を通じての青少年の指導にも熱心。週二回、店を閉めてから、小田原スポーツセンターで青少年相手に汗を流している。現在、小田原柔道協会の役員を勤めているが、このほど柔道四段に昇進。



# わが家の古き写真

小田原市南町三一一五

隠岐威重さん所蔵

日露講和条約(ポーツマス条約)が締結されたのは明治三十八年(一九〇五)九月五日。撮影は同年十月二十四日。おそらく故国に凱旋する前に撮ったものと思われる。

明治38年10月24日 於奉天口満洲軍総司令部

総司令官の大山巖元師は

ことがあ

二列目右から八番目。隠岐さんの祖父隠岐重節少将は前列右から四番目。日露戦争のときは、後備歩兵第一旅団長として出征。三月八日から十日にかけて奉天総攻撃の戦闘に加わっている。重節氏は陸軍兵学寮青年学舎の第一回卒業生。二十二歳のとき佐倉藩から選ばれ派遣されている。学舎は日本陸軍草創期の士官養成機関として、大村益次郎の発議により、明治三年大阪城内に設立された。教育期間一年三カ月で卒業と共に歩兵少尉に任官。十年の西南の役では負傷。二十七、八年日清戦争には第一歩兵連隊長として従軍。

連隊長時代の様なエピソードが昭和三十年代頃のある新聞の連載物に載った

三十年、五十三歳で予備役編入。及木(希典)に先を越されたとか家人に言ったことがあるそう。長州閩が幅をきかした時代、徳川譜代の堀田氏城主の佐倉藩出身では、少将が最高の位であったと思われる。(陶生)

## あとがき

お蔭げをもちまして、今回も増ページでお届けすることが出来ました。

本年度は、一二七号を一月に一二八号を三月に発行する予定です。原稿は歴史物に限りません。歌、詩、俳句、川柳、コント、紀行文、随想、イラスト、写真等なんでも結構です。送付先は編集委員まで。

なお編集委員の住所は次の通りです。

- 西山銈太郎 小田原市曾我岸一〇 〇四〇五五
- 高田喜久三 小田原市栄町三一一四 〇四三三六
- 和田 登 小田原市東町三一一二一〇 〇四三三三
- 岡部 忠夫 小田原市南町二一六一三 〇四三三三

### 特別賛助会員

店社  
造株会  
酒粧株式  
相田治書  
相田治書  
袋柄の  
智恵紳士服の  
伊勢かまぼ  
小田原信用金庫  
鐘紡株式会社  
力木ボウ化粧品  
阪寿堂スポーツ  
大営不動産  
割烹おる本店  
ちんまろ書  
八小堂マ書  
八平子井  
株武会社 報